チェコの「カフカ会議」とサルトル，アラゴン

土　肥　美　夫

I

1963年5月，チェコスロヴァキアの首都プラハの近郊リプリツェで，チェコのゲルマニスト委員会主催により国際ゲルマニスト会議が開かれた。それはチェコにおける戦後初の大胆な試みだった。討論の対象に選ばれたのは，プラハのユダヤ人作家フランツ・カフカ（1883–1924）である。従ってこの会議は通称「カフカ会議」と呼ばれた。ゲルマニスト委員会とともに，この委員会自身が所属しているチェコスロヴァキア科学アカデミーのチェコ文学研究部門，プラハのカレル大学哲学部，及びチェコスロヴァキア作家同盟が共催者となり，27名のチェコ内外のカフカ学者が招待された。外国から参加したのは，主として東欧の社会主義国（東独，ポーランド，ハンガリー，ユーゴースラヴィア）の学者，作家であるが，西欧からはフランス共産党政治局員の理論家・作家ロジェ・ガロディとオーストリア共産党員でトリアティ理論の支持者である評論家エルンスト・フィシャーとが特別参加した。会議で開会の挨拶を述べ，最後に「討論の総括」を行なったのはカレル大学独文科の主任教授で，現在チェコ作家同盟の議長をも兼ねているエデュアルト・ゴルトシュテュカー博士である。

チェコにおけるゲルマニストのこの第一回国際会議は，とりあげた作家が，従来社会主義国においてドイツ文学の最大の精神的遺産として公認さ

れてきた古典的ヒューマニズムの作家ゲーテ，シラーなどではなく，また社会主義リアリズムの系譜につながるハイネやトーマス・マンなどでもなく，マルキシズム文学理論の第一人者ルカーチによって「西欧的デカタンス」の代表的作家の一人ときめつけられていたカフカであったということ，さらに，会議参加者のカフカ文学論議が従来の社会主義リヤリズム理論をはみだして行なわれ，社会主義国における文学・芸術の在り方にひとつの新しい方向をうちだしたことで，チェコにおけるドイツ文学の評価という限られた問題意識を遙かにこえ，リアリズム文学の新動向として，東西を問わずヨーロッパ各国で非常な注目を浴びた。

会議前後のチェコをめぐる文学的状況を検討するに先立って，当時この会議を報道した新聞のなかから，特に西独の有力紙 》Die Welt[1]《 をとりあげ，その論調の要旨を紹介しておこう。

》東欧圏できびしい検閲のもとにあったカフカの作品の運命，また，いわゆる「雪どけ」現象から最近再び「西欧的偏向」にたいして統制を強めてきているソヴィエトの芸術政策の背景などを考慮すれば，「カフカ会議」が開かれたことじたい驚くべきことであった。これまで東欧圏で，その討論がこれほど実質的に行なわれ，その成果がこれほど実り豊かであったコミニストたちの会議はなかった。スターリン派の理論家ガロディまでも文学界のイカルスともいうべきカフカの作品を祝祭し，さらに驚くべきことには，参加者の多くが，東独からの参加者によってのべられたところの，社会主義的人間にとってカフカはもはや何も与えない，疎外はとっくに克服されているからという主張に，敢然と立ち向かった。カフカの作品はいまなお我々に語りかけるというプロテストが行なわれ，その頂点は，E．フィシャーの講演であった，云々。《そのあと，フィシャーの経歴と思想に

1　Wird Kafka entdeckt? *Die Welt* 12. 6. 1963. 及び Kafka und die Koexistenz der Köpfe: Ergebnisse einer Konferenz der tschechoslowakischen Akademie. Ihre mögliche Folgien. *Die Welt* 19, 7. 1963.

ついてかなり詳しくのべるとともに，彼自身も参加し，「カフカ会議」の参加者のなかにも影響を及ぼした1962年のモスクワ平和会議におけるサルトルの講演にふれている。

このような》Die Welt《の論調には，東西ドイツの対立を反映して，東独代表のカフカ文学観を特にきびしく批判している点はあるが，会議開催の事実にたいする驚きとその内容の評価については，イデオロギーの相違をこえて，西欧世界に共通のものであった。そのことは，論説の最後に控え目に引用された言葉，「カフカ会議」にたいして西側のある共産党機関誌にのせられたところの「新しい春を告げる最初のつばめ」という輝かしい評価の言葉からも推察される。

しかし，いずれにしても，西欧世界から，突然の，驚くべき事件にみえた「カフカ会議」が，実は，チェコ国内における知識人・作家のスターリン体制にたいする批判運動の過程で戦いとられたひとつの成果であったこと，そのことは，同じ1963年に出版され画期的なベストセラーになったムニャチコの作品『遅れたレポート』の意味するものと併せ考えてみるとき，一層明らかになる。オーストリア・ハンガリー帝国のビュロクラシーと人間疎外と死闘したカフカ文学をリアリスチックに再評価した「カフカ会議」と，スターリン体制の権力的な官僚機構の矛盾をあばいて社会主義国に存在する人間疎外の問題をクローズ・アップさせた『遅れたレポート』の出版とが，同じ年に行なわれたという事実の背後には，単に偶然の一致としては片づけられない共通の要素，社会主義発展途上のチェコにおける歴史的な必然性があるように思われる。この問題は，現在進行中のチェコにおける重大な一連の政治的事件及び作家同盟の動きにもつらなるアクチュアルな問題であるが，チェコ文学の専門家ではない私にはその点に深くたちいるだけの資料も力も持っていない。ここでは国内的よりもむしろ国際的な視野から，「カフカ会議」を中心に，そこで出された成果の「問題性」を，ひとつには社会主義リアリズムの歴史的発展という普遍的な観

点から，もうひとつは「民族性」という特殊的な観点から考えてみたいと思う。

先ず，そのような問題意識を，1963年5月の「カフカ会議」前後に限って，拡大し，捕捉してみよう。

第一に，1962年7月，モスクワ平和会議でサルトルが「文化の非武装化」[2]という題で講演し，カフカ文学の意義に特に言及したこと。

第二に，同年，カレル大学哲学部から名誉博士号を授与されたルイ・アラゴンが，プラハで記念講演し，「開かれたリアリズム」[3]を提唱して社会主義リアリズムに新しいホリゾントを示したこと。

第三に，1964年の春から翌年にかけてウィーン，プラハ及びチェコの主要都市で，「カフカ展」が行なわれ，チェコにあるカフカ文学の資料，写真及びカフカ文学のイメージによる絵画などが公開，展示されたこと。

第四に，1965年11月，「カフカ会議」と同じリブリツェの城館で，同じくチェコ・ゲルマニスト委員会の主催により，第二回目の国際ゲルマニスト大会が開かれ，今度は，カフカのみならず，リルケ，ヴェルフェル，M. ブロート，E. E. キッシュ，F. C. ヴァイスコプフ，ルイス・ヒュルンベルクなど今世紀のプラハと関係の深いドイツ語作家たちがとりあげられたこと。

以上のように，問題意識を一連の歴史的時点でとらえてゆく場合，大切なことは，問題の単なる歴史的註釈にとどまらず，問題発展の動因になっている要素を鋭く見極めてゆくことである。それは，さきにもふれたように，文学における「民族性」と「リアリズム」の問題である。チェコのゲルマニストが「プラハのドイツ文学」を問題にする場合，そこにはわれわ

2　Jean-Paul Sartre, Die Abrüstung der Kultur, Rede auf dem Weltfriedenskongreß in Moskau, *Sinn nnd Form* 14. Nr. 5–6. 1962.

3　Louis Aragon, Rede in Prag, gehalten anläßlich der Ehrenpromotion durch die Philosophische Fakultät der Prager Karls-Universität. *Sinn und Form* 14. Nr. 5–6. 1962.

れ日本人のゲルマニスト，あるいはまたフランスのゲルマニストがドイツ文学を問題にする場合とは全く異なった状況がある。プラハのドイツ文学は，誤解を顧りみず身近な例でいえば，敗戦前の朝鮮における日本文学，あるいは日本における朝鮮文学のように，チェコ人の都市であるプラハの一角に住む少数民族，ドイツ人とユダヤ人によって書かれた文学である。したがって，ドイツ人からみれば，それは言葉の故郷も血肉のつながりももたない，つまりドイツ・ナショナリズムと無縁のいわば「孤島の文学」であり，チェコ人からみれば，支配層の疎遠な言葉で書かれた「世界文学」であるとともに，自分たちと同じ町，同じ環境から生まれた文学として，場所的歴史的な連帯性をもったところの「国民文学」の一種でもある。しかも，会議でとりあげられたドイツ語作家たちは，いわゆる「ハプスブルク・モナルヒー」の崩壊とチェコ民族の独立という歴史的な転換期を経験した作家ばかりである。そのような歴史的状況のもとで，プラハのドイツ語作家，特にユダヤ人のドイツ語作家たちは孤立した孤独な戦いを強いられ，チェコの作家たちには民族の独立を獲得するための戦いが課されたわけであるが，ユダヤ人とチェコ人は民族的基盤を異にしながら，大国，大民族にたいして少数民族の運命を共通にもっていた。たとえば，第一次大戦前後のプラハの同時代作家，ユダヤ人のドイツ語作家カフカの作品とチェコの代表的作家ハシェクの作品とを比較してみても，そこに悲喜劇の相を越えたリヤリティ，つまりモナルヒーの官僚機構にたいする被圧迫者共通の抵抗が読みとれるのである。このように，チェコの歴史的状況とチェコ文学との連関をたえず探求しながら，リルケ，カフカをはじめ，チェコの人民に深い影響を与え，チェコの独立に寄与したE. E. キッシュのルポルタージュ文学，レーニンとともにリルケの愛読によってリアリスチックな詩文学の香り高い新境地を開拓したヒュルンベルクなど，今世紀初頭から第二次大戦後にいたるプラハのドイツ文学を，チェコ文学と関係づけて問題にすること，すでに二回開かれた会議におけるチェコのゲルマニストた

ちの根本的な立場はそこにあった。そして会議の学問的な成果もそこから生まれ，評価されねばならないのであるが，そのような問題意識とその成果は社会主義国におけるリアリズム文学の発展とどのように連関づけられるのか，それはリアリズム文学の発展なのか，それともリアリズム文学の変貌ないし変質なのか，まずその点をさきにあげたいくつかの時点での問題意識をたどりながら考えてゆこうと思う。

II

さて，さきにあげた西独《Die Welt》紙の「カフカ会議」評もふれていたように，戦後の西欧で一種のブームにさえなっていたカフカの作品を，東欧でもとりあげるよう呼びかけたのは，サルトルである。サルトルがカフカ文学の熱心な支持者の一人であることは，『文学とは何か』『ユダヤ人』その他彼の著書に散見される彼のカフカ論を通じてすでに知らされていた。[4] しかし，1962年夏モスクワで開かれた「全面軍縮と平和のための世界大会」に参加した彼が，「文化の非武装化」と題する講演のなかで，「文化的競争の実例」として専らカフカの文学のみを引き合いに出し，東欧におけるカフカの作品の翻訳出版とそのマルクス主義的批評の必要を力説したとき，会議の場所と性質からして，彼の大胆な発言は，特に東欧から参加した知識人に，おそらく衝撃にもひとしい印象を与えたにちがいない。彼の発言からカフカに関する部分をかいつまんで要約すると大体次のようなものである。

4　サルトルのカフカ文学観については，大戦中 „Explication de《L'Etranger》“, „Aminadab„(いずれも1943)でカフカにふれた頃の実存主義的な解釈と戦後のアンガージュの立場を明確にうちだしたなかでのカフカ論との間には相違があり発展がある。ここではこの問題にたちいる余裕はないが，Maja Goth, Kafka et Jean-Paul Sartre, **Feanz Kafka et les Lettres françaises,** Paris, 1956. p. 137–238 を参照されたい。

彼はまず西欧のブルジョア批評家たちによってでっちあげられたカフカ解釈に攻撃を加える。つまり，彼らは，ブルジョア社会の悪弊には眼をとじて，官僚主義を社会主義社会の必然的欠陥と宣言することから始め，カフカを官僚主義の告発者に仕立て，その後は，できればそれをロシアに送りこんで，そちらの読者がカフカの作品『審判』の世界に自国の現状を認めてくれるようにと期待しさえしていればそれでいいのだ。しかしそれだけのことならまだ大したことでもないのだが，と，サルトルの批判はソヴィエトの方にも向けられる。つまり，そのように仕掛けられた攻撃がソヴィエトに反射的に防禦態勢をとらせることはよくわかるとしても，(自分たちを侮辱している作品など翻訳する必要はない，とソヴィエトではいわれる)，その防禦態勢そのものが一種の反射的な戦争なのだ，とサルトルは批判するのである。そういう冷戦の結果，カフカは二重の損害をこうむっている，西側ではでっちあげられ，ゆがめられ，東側では黙殺されている。そこでサルトルは，フルシチョフのいう「共存」を文化に適用し，競争を前提とした文化の総合的統一を唱え，その実例として再びカフカをとりあげる。サルトルは，まもなくカフカの短篇を刊行するはずだが西側の批評家がゆがんだ解釈をしているのでソヴィエトにいる者の多くはカフカを呪われた敵とみなしている，というソヴィエトの友人にたいし，なぜあなたの方でもマルクス主義的批評を公けにしてカフカの正当な権利を要求しないのか，事実の説明にかけてはあなたがたの方が成功するのではないだろうか，西側の批評からも正しいものだけをとりあげてゆけばあなたがたの方法の方がずっと成功するのではないだろうか，文化の内側にある垣根をとりはらって平和的に挑戦し，カフカは誰のものか，どちらがよりよく彼を理解するか，彼は誰に最も役立つかを明らかにすることだ，とサルトルは答える。彼は，文化擁護の名のもとに人間を敵に廻して戦争を遂行する，そういう場合の偶像化された文化観を徹底的に批判するとともに，冷戦的状況のもとで分裂している文化の統一を，知識人，作家，芸術家によびか

ける。そして，特に，植民地，帝国主義から脱却した国々における文化問題に注目し，それを支援するよう呼びかける。それらの国々は，過去の民族的伝統と旧支配国の文化的遺産とたたかいながら，国民的統一と同時に革命的な現在的文化を創り出そうとしている。そういう国民文化の弁証法的統一が世界における文化の統一を促進する。それらの国々は，旧支配者にたいして，学問，思想，芸術のインターナショナルな統一を必要とする。彼らにはマルクスが必要だ，しかしまたカフカも。

サルトルがモスクワ平和会議の壇上から東欧でも新興国でも「カフカが必要である」所以を強調した頃，事実，ソヴィエトではまだ短篇の翻訳すら出ていなかったし，ドイツ語を母国語とする東独ですら戦後その出版は禁じられていた。[5] ユーゴーを除きその他の東欧諸国でも事情は同様であったらしい。チェコではカフカの生前から彼のチェコ人の恋人ミレナの『火夫』チェコ語訳に始まり，翻訳，評論の数もかなりあったが，ナチ占領時代にその関心は中断され，戦後一時再燃しはじめたものの，スターリニズムの時代にふたたび中断され，ソヴィエトの第20回党大会で個人崇拝が批判された後初めて本格的な研究・出版の道が開かれた。しかし，サルトルが講演で要請したようなカフカ文学にたいするマルクス主義的批評の業績は当時まだ微々たるものだった。[6] その領域でのひとつの成果はルカーチの評論であったが，彼の「フランツ・カフカかトーマス・マンか」[7]というような問題設定から生ずる結論は，べたほめとこきおろし，祝祭と断罪の両極端

5　その頃の東独におけるカフカについては．Rudolf Walter Leonhardt,: Goethe, Kafka und Twist, *Reise in ein fernes Land*, Die Zeit（西独週刊誌）1964. Nr. 16 のレポートが参考になる。（このレポートを含めて出版された *Reise in ein fernes Land* は日本でも飜訳されているが，抄訳のため，上記 Nr. 16 の部分は訳されていない）

6　Paul Reimann, Eduard Goldtücker, Kraus Hermsdorf, Helmut Richter, Ernst Fischer などにカフカに関する論文・著書がある。

7　Lukács, Georg: Franz Kafka oder Thomas Mann? in *Wider den mißverstandenen Realismus*, Hamburg 1958.

があるのみで，作品に即した批評は無視される。問題は彼のマルクス主義的批評方法の教条性にあった。「批判的リアリズム」から「社会主義リアリズム」へ，というイデオロギー的な批評の図式しかもちあわせないルカーチには，疎外される自己をさらに否定して疎外する社会と戦いつづけたカフカの創作行為とその成果を，正当に評価する理論がなかった。教条的なマルクス主義批評が自らの欠陥を知るには，社会主義社会の発展そのものがスターリン主義の歪みを経験しおえるまでの歳月が必要だった。サルトルは，彼のモスクワでの講演のなかで，マルクス主義批評の教条性を批判するよりもむしろ西側の批評のいいところはいいところとしてとりいれて方法を豊かなものにするよう要請したが，同年秋プラハを訪れて》Kulturni zivot《（文化生活）紙の記者とインターヴュー[8]したさいには，「ドグマチズムの死滅」を強調し，その結果マルキシズムは生命をとりもどすことが可能になり不可避になった，そのためマルキシズムの思想家たちは，まず「社会主義自体をマルクス主義的に解明する必要性」に直面せねばならない，と語ったといわれる。サルトルはコミニストではない。しかし彼はコミニストに近い思想家であり，彼のモスクワ及びプラハにおける発言には，アクセントの差異はあるにせよ，マルキシズムが現代においても状況の全体を把握しうる唯一の有効なイデオロギーであるとの思想に貫かれていた。だからこそ，チェコの知識人に深い印象を与えたのである。その影響の大きさは，翌年の「カフカ会議」における研究報告者の次のような言葉からも容易に推察される。文学批評家で，チェコの文学誌》Plamen《（炎）の編集長として活躍しているハーエクは，サルトルの発言を「われわれに向けられた要請」として受けとり，それに答えたものとしてフィシャーとカレル・コシックのカフカ論[9]をあげるとともに，サルトルのカフカ発言が偶

8　このインターヴュー及びその内容については，山内昶「サルトルとルカーチ」『文学会論集』（甲南大学）26，1965年から教わった。

9　Ernst Fischer, Franz Kafka, *Sinn und Form* 14, Nr. 4, 1962, S. 497–555. 及び Karel Kosík, Kafka a Hašek, *Slovenské pohl'ady* 79, Nr. 4, 1963, S. 80–84.

然ではなかった所以をこう説明している。「サルトルの発言で，カフカは，歴史的な現時点における資本主義的世界と社会主義的世界の人間の問題を互いに切り離したり，互いに結びつけたりするあらゆる事柄のシンボルになった，両世界の間に社会的政治的な対立ができているが，あらゆる対立にもかかわらず，われわれの地球がなお依然としてひとつの天体であり，世界文学が，人間の相互理解の普遍的な媒介者として，(それになおマルキストとしてつけ加えるなら，) 人間性の将来，未来の人間の形成のために戦っている相互に対立した二つの社会倫理の構想の戦場として，現に存在し，今後とも存在しつづける，カフカはそういうことの証明になったのである。[10]」また，ゴルトシュテュカー教授はカフカ研究の方法の問題としてサルトルのモスクワ講演から次の箇所を引用している。「ある作品の深さは，国民の歴史，言語，伝統から生ずる，つまり，芸術家もまたその一部として所属しているところの生きた社会を通じて，時代と場所とが芸術家に問いかける，特殊な，そしてまたしばしば悲劇的な問題から生ずるのである。[11]」このサルトルの言葉は，その後同じゴルトシュテュカー教授の構成による「カフカ展」のモトーとしても掲げられていることからみても，会議に参加したチェコ・ゲルマニストのカフカ問題にたいする基調的な態度を示していると考えてさしつかえないだろう。ハーエクがカフカ文学の現代世界における普遍性の面をサルトル発言から引きだしているのにたいして，ゴルトシュテュカーは国民的歴史的な特殊性の面で受けとめているのであるが，その立場が基調となって，1966年に出版されたカフカ会議討論報告集の『フランツ・カフカ，プラハの視界から』という標題にも反映されているのである。「カフカ会議」のこのような基調は，マルクス主義的

10 Jiří Hájek, Kafka und wir, *Franz Kafka aus Prager Sicht* hsg. von Paul Reimann, Berlin, 1966, S. 109–110.

11 Eduard Goldstücker, Über Franz Kafka aus der Prager Perspektive 1963, in *Ebenda* S. 27.

批評方法というイデオロギー的な立場にたたない者にも，一応文学研究上当然のことのように思われる。しかしそこには西欧の非マルクス主義的なカフカ論にたいする抵抗が示されていることを見逃してはならない。そしてこのような抵抗は，カフカ会議で初めて示されたものではなく，それよりずっと以前から，チェコ人のカフカ文学観に固有のものであった。チェコがナチスから解放された直後の1945年，現代におけるプラハのドイツ語作家の一人ヴァイスコプフは，『カフカとその系列』というエッセイを書き，そのなかで，カフカとチェコとの深い影響関係を例証しながら，「ドイツの職業的な文学史研究は，これまでカフカに関し何ひとつまともな仕事をなしえなかった。概して，その理由は，その態度が無意識的あるいは意識的に傲慢で，小さなスラヴ民族の文化と歴史がドイツ文学の大きな枝全体〔プラハのドイツ文学のこと一筆者〕に及ぼした影響の研究など考えもしなかったからである[12]」とのべている。ゴルトシュテュカーもまた，歴史的社会的要素を離れた個人的ないし心理的，宗教的あるいは実存的な西側のカフカ解釈に対抗した立場に彼の基調を定め，サルトルの発言を援用しているのである。しかし同じ立場で同じ内容のことをいっているようにみえながら，ヴァイスコプとゴルトシュテュカーがおかれている状況は全くちがっていた。つまり，アンチ・ファシズムの戦いの勝利感で社会主義国が強く結ばれていた大戦直後の時代と，社会主義運動がスターリニズムの批判で民族的に多元化しつつある1960年代との相違である。この状況を文学的にいえば，ジュダーノフ的な教条的社会主義リアリズムでは新しい現実が把握できなくなったという事態の出現である。そこで次にアラゴンのプラハ講演を中心にして教条主義批判と「カフカ会議」における新しいリアリスチックなカフカ批評との連関をみてみよう。

12　F. C. Weiskopf, Franz Kafka und die Folgen, *Über Literatur und Sprache, Gesammelte Werke* VIII, Berlin, 1960, S. 286.

III

モスクワでの講演でカフカ問題に関する重要提言を行なったサルトルが，同年の秋プラハを訪れて》Kulturni zivot《誌のインターヴューに答えた，それよりすこし前，やはりフランスからコミュニストの作家アラゴンがプラハを訪れ，カレル大学の名誉博士号をうけるに当たって講演した。この講演は，社会主義リアリズムの文学理論が直面している困難を率直に訴えて，ドグマチズムに陥ったリアリズム理論の矛盾を鋭く批判するとともに，リアリズム文学の新たな可能性を切り開く新しい「開かれたリアリズム理論」が必要であることを説いたもので，具体的に作家や作品をあげてはいないが，彼の論調には，作家としての自らの体験に即した率直さと困難な状況のなかをあくまでリアリストとして生き抜こうとする情熱とがみなぎっていた。彼は，「われらの時代のあらゆる国々の作家が直面している難問と普遍的な問題のため[13]」ばかりでなく，「これからの世界で，国民の将来がかかっている生存と伝統と権利をドグマチックに否定しようとしてもそれは不可能であることを自ら実証している国[13]」つまり「チェコの作家に固有の問題のため[13]」にも，アカデミーの記念講演としては全く破格の調子でリアリズムの問題に関して彼が現に抱いている真情を披瀝したのである。

彼の講演は，カフカ会議と直接の関係はなかった。しかし翌年のカフカ会議に参加したチェコの文学者，作家に強い刺激と鼓舞を与えたであろうことは容易に推察される。そればかりではない。アラゴンは，フランスからカフカ会議に参加した同志ロジェ・ガロディが会議と前後して出版した著書『岸辺なきリアリズムについて，パブロ・ピカソ，サン・ジョン・ペ

13 Aragon, Rede in Prag, *Siun und Form* 14, 1962, S. 929.

ルス，フランツ・カフカ』に》Préface《を書き，ガロディの著書にたいする讃辞を，「気紛れが学問の仮面をつけようとし，ドグマチスムが芸術家気どりの顔をしようとする世界にあって，ロジェ・ガロディの本はひとつのイヴェントである。わたしがその静かな大胆さに脱帽しているのは，かれがリアリストだからだ。まちがわないでほしい，社会主義的リアリストだからである。私には，わが国でリアリズムをすでに判決され，宣言ずみの，葬り去られたもののように考えて，そこから離れようとする若ものたちが，この本に，芸術が世界の変革に寄与するアクチヴな瞑想の始まりをみるであろうと考えて，うれしい。[14]」という言葉で結んでいる。したがって，半年の間に相前後しておこった，アラゴンのプラハ講演「開かれたリアリズム論」，フランスにおけるその具体的な実現として，カフカ論を含むガロディの『岸辺なきリアリズム』出版，それに絶大な評価を与えたアラゴンの「序文」，ガロディの「カフカ会議」参加，この一連の密接な連関を考えてみると，アラゴンと「カフカ会議」とのつながりには決して無視することのできない必然性があるといわねばならない。そこで，まず，「開かれたリアリズム論」を提唱したアラゴンの教条主義批判から出発して，ガロディのカフカ会議報告「カフカ，現代芸術とわれわれ[15]」の意義を解明してゆこう。

アラゴンは，自分は思考と行動，理論と実践(創作)との一致に努力している一人の人間であって文学理論家と呼ばれることには強い抵抗を感じると前置きした後，現に行なわれている理論家のドグマチックな越権にたいし文学理論と文学作品との関係から批判を加える。彼によれば，ドグマチ

---

14 Roger Garaudy, D'un Reálisme sans Rivages, Picasso, Saint John Perse, Kafka. Préface d' Aragon, Paris 1963, p. 18.

15 Roger Garaudy, Kafka, die moderne Kunst und wir, *Fanz Kafka aus Prager Sicht*, hrsg, von Paul Reimann, Berlin, 1966, S. 199–207. このカフカ論は Roger Garaudy, *D'un Reálisme sans Rivages* p. 153–242 のカフカ論を要約したものである。

ックな文学理論では，「理論が足」「作品は靴[16]」の関係になっている。そしてその例証として「英雄的主人公」の要請をあげる。ところがそのような主人公は理論家の頭のなかに願望としてのみあり，願望であったものが繰り返されるうちに理論に変わったにすぎない。英雄的主人公の有無で作品の優劣合否を決めるというメカニズムの例は，いわゆる「典型」理論についても同様である。たとえば，ドン・キホーテとかシュベイクとかが典型的に実在するわけではない（シュベイクは，作家自身の自由な選択に基づくリアリズムの強さによってのみ，典型になるのだ)。「英雄的主人公」理論にしても，「典型」理論にしても，願望が正当化されないまま要請になり，法則になり，つまりドグマになって，その結果，作家の反抗心を刺激し，文学の発展を阻害する。理論そのものが悪いわけでは勿論ないが，理論がドグマ化すれば，変転する現実の新たな事態に適応できなくなって，自分の尺度に見合う都合のよい事態だけを要請するようになる。そういう理論家はリアリストを自称しながら実はその反対のイデアリストになっている。過去の夢想的ユートピア，反抗的ユートピア，RAPP のユートピアと同様，現在のリアリズムもドグマ化されたことによって危機にひんしている。アラゴンが「開かれたリアリズム論」を要請するのも，現在におけるリアリズムのこのような危機意識に由来しているのである。しかし彼は作家としてリアリズムの立場を捨てようとはしない。なぜなら彼の危機意識を底で支えているものは彼の「芸術におけるリアリズムの必然性に関する不動の信念[17]」だからである。彼は現代のリアリズムを「左舷からも右舷からも海賊の長柄の斧で襲いかけられている船[18]」にたとえる。右舷の敵にとっては，実は文学的なリアリズムなど眼中になく，リアリズム運動を前衛とする社会組織の絶滅が目的である。問題は左から襲いかかる勢力で，

16 Aragon, Rede in Prag, *Sinn und Form* 14, 1962, S. 923.
17 Aragon, *Ebenda*, S. 926.
18 Aragon, *Ebenda*, S. 926.

フランスにおける》Nouveau Roman《派がそれだ。彼ら現代のアンチ・リアリストたちは過去の世代のように神秘主義や形式主義によってリアリズムに楯つくのではなく，彼らがもちだすのは》la description pour la description《（記述のための記述）であり，実際には自然主義の現代的形態にほかならない。だから彼らは「われこそリアリズムなり」という。そのように，アンチ・リアリスチックな方法にリアリズムのレッテルがはられるという状況が，作家，特に若い作家をリアリズムから離反させる危険を招いている。彼らのリアリズムにたいする不信は，リアリズムそのものの内部にある，つまり，ドグマチックな文学理論に原因がある。ドグマチズムが文学に求めるのは，芸術ではなく教育学の役割だ。したがって，ドグマチズムは人生を拘束し，閉じられたイメージを与え，諸芸術の開かれた概念，生成する文学に逆行する。その結果作家はリアリズムから離れ，アンチリアルな方法をリアルとして追及するようになる。それは作家にとってのみならず，人間全体にとっても不幸なことだ。

このような論旨から，アラゴンは，「開かれたリアリズム，アカデミックでなく，固定されないで，発展の可能性をもったリアリズム」を要請するのである。規格はずれの現実を探求し，新しい事実を熟慮し，出来事の核心にふれることのできるリアリズム，現実のメカニックな記録ではなく，現実のパイオニアとして，われわれを目覚めさせ，時には混乱させるリアリズム。そういうリアリズムをアラゴンは二十世紀後半における文学理論の課題としてのべ，真の理論家の誕生に期待をかける。アラゴンは，『方法の問題』[19]の観点からマルクス主義の停滞を批判しその克服に努める哲学者サルトルとちがって，自分は理論家ではないと自己の限界をはっき

19　Jean-Paul Sartre, Question de méthode, in Critique de la raison dialectique（邦訳，平井啓之『方法の問題』）。彼のモスクワ講演における，カフカの「マルクス主義的批評」の要請は，『方法の問題』で提起した問題のひとつの具体化とみることができる。

り意識しつつ，しかもたえず理論と実作との対決を迫られる作家としての立場から新しい「開かれたリアリズム論」を要請しているのである。したがって，サルトルがマルキシズムを方法論として問題にする場合と，アラゴンがリアリズムを作家の態度として問題にする場合とでは，ドグマチズム批判という点では一致しながら，具体的な問題については微妙な解釈の相違がでてくるのは当然であろう。この種の相違は，サルトルとアラゴンの立場の相違とはまた別に，カフカ会議においても，カフカ問題をマルクス主義的批評の問題として取扱う立場と，それをリアリズムの問題に包摂しようとする立場との微妙な相違となってあらわれているように思われる。マルクス主義的批評にしても社会主義的リアリズムにしても，いずれもドグマチズムから解放され，それらがサルトル，アラゴンのいうように，現実の発見学になり，現実のパイオニアになりえたならば，相互に相補って前進しうるものであるが，実際には「カフカ会議」においても方法の問題とリアリズムの問題とは十分かみあわないで未熟なまま投げ出されているようである。しかしそれにもかかわらず，西欧におけるこれまでの心理的あるいは形式的なカフカ解釈ではえられなかったリアリスティクなカフカ像をうちたててゆく新軌道を切り開いたものとして，カフカ会議の意義は大いに評価されねばならない。ここでは会議における報告者の発言内容とその評価を個々にわたり詳しく分析する余裕はないが，アラゴンとの連関において，彼に支持されたガロディのカフカ論を最後にとりあげておきたい。

ガロディのカフカ論は，彼の会議での報告が「カフカ，現代芸術とわれわれ」と題されているように，カフカを時代的社会的条件から，つまり「プラハの視界から」解明しようとする立場を越えて，カフカの作品は現代芸術の根本問題を解明しているという認識に基づいている。彼は現代におけるカフカ文学のリアリティを率直に認めて，新しいリアリズム論を展開する。第二次大戦直後フランス・コミュニストたちが「カフカは炎書す

べきか」というアンケートを作家・知名人たちに送って返答を求めたことを想起すれば，同じコミュニストであるガロディのカフカ認識はまさに劃期的な意義をもつものといわざるをえない。従来の狭隘なリアリズム論からはデカタンス作家，》la litterature noire《として葬り去られていたカフカ文学に，リアリティを認めるとすれば，当然リアリズム論そのものが変わらなければならない。そこでガロディは，まずリアリズムの定義を拡大し，それに新しい次元を発見することからカフカ論を始める。

ガロディによれば，ある作家・作品の時代的社会的条件をマルクス主義的に解明してゆくことは，重要なことではあるが，それは認識の手がかりであり，問題点の提起であって，文学・芸術への解答とはなりえない。もしそのような批評規準のみで満足していれば，作家を作家としてでなく，作家を歴史家，政治家，哲学者として評価することになる。芸術におけるリアリズムは，作品に基づいて成立するもので，決して作品以前にあるものではない。マルキシズムは芸術的創造の特殊性を認めている。作品と現実との関係の複雑な弁証法こそマルクス主義美学の主要課題である。芸術作品は》Arbeit und Mythus《（労働とミュートス）に依存している。「労働」とは，すでになしおえられた事柄，あるいは現になされている事柄の意識であり，「ミュートス」とは，これからなされねばならぬ事柄の意識である。マルクスは下部構造と上部構造との媒介者として「ミュートス」に言及するさい，芸術上の現実を定義づける最も重要なエレメントとして人間がそこに居合わせていることの役割を強調する。ガロディは，この「ミュートス」の導入によって狭いリアリズムの解釈をしめだすのである。なぜなら，「人間にかかわりのある現実」は，現に現実として存在しているばかりでなく，現実に欠けているもの，現実が変わってゆくにちがいな

20 Mythus，ガロディは，「自然と社会とのこれまでまだ支配されていない領域で是非なしとげられねばならない事柄の個人的ニュアンスのある具体的意識」の意味で用いている。したがって「神話」の意ではない。

いもの，個々人の夢や諸国民のミュートスから初めて醗酵してくるものでもあるからだ。われわれの時代のリアリズムはそのようなミュートスの創造者，叙事的，プロメテ的リアリズムである。このようなパースペクチーフにたってのみ，カフカの作品はマルキストにとってアクチュアルな意味をもつものとなる。

ガロディはカフカの作品の分析と批判にさいして，カフカの世界のヴィジョンを三つの領域，つまり「体験された世界とその葛藤」「内的世界とその多義性」「構築された世界とその矛盾」とにわける。第一はカフカと彼の外部の世界との関係，第二はカフカと彼自身の世界との関係，第三はカフカと彼の作品との関係である。カフカの外部世界との関係は分裂であり，内部世界との関係は疎外であり，作品との関係は疎外の克服である。彼は，第一の葛藤，たとえば父親との葛藤を，精神分析的方法をしりぞけ，社会的な緊張不安の拡大として把握する。また第二の内的な不和軋轢，つまり眠られぬ夢に，夢のない疎外の人生を対置し，宗教的解釈をしりぞける。第三の矛盾というのは，彼の創作が人生の葛藤，疎外を克服するための表現であり，真の掟への憧憬を目覚ますものでありながら，彼の憧憬をさまたげる障害物しか表わしえないということである。彼はその方法を疎外の極限までおしすすめる，そうすることによって，この世の誤てる秩序にたいし，真の人生の掟，真の人間の掟への憧れを目覚ます，カフカの長篇小説はすべて未完成であるが，それがわれわれの人生の現実の姿である。カフカの小説は無限への出発地点，人間にとって真に人間的な次元へ到達するための出発点なのである。カフカの偉大さは，彼が，現実の世界とユニークな全体を形づくっているミュートスの世界を創造することに成功した点にある。

以上のようなエスキスでガロディのカフカ論をデッサンすることができたかどうか，はなはだ心もとない。しかしそれが，一方ではカフカに絶望のみをおしつけがちな西側の解釈，他方ではカフカにデカタンスのレッテ

ルしかはらないドグマチックな東側の解釈，そのいずれをも否定したところに成り立っていることは推察してもらえるだろう。現在なおわれわれが（社会主義諸国をも含めて）おかれている人間疎外的な現実世界全体と関わりあう真に人間的な「戦い」の相に照明をあてたガロディのカフカ論が，サルトルのいう平和共存的なマルクス主義批評になりえているかどうか，アラゴンのいう「開かれたリアリズム」の要請に真に答えているかどうか，いずれにせよマルクス主義批評の新しい展開であり，そのひとつの成果であることにまちがいない。（1968. 8. 5. 脱稿）

〔追記〕拙稿はいわゆるチェコ事件以前に書かれたものである。